富山大学教育学部における「学校インターンシップ」の成果報告

―2022年度実施アンケート調査をもとに―

増田　美奈[1]・和田　充紀[1]・久保　雅則[1]・隅　敦[1]・池田　丈佑[1]・石川　秀明[1]・磯﨑　尚子[1]・小澤　郁美[1]・尾矢　貞雄[1]・上山　輝[1]・岸本　忠之[1]・月僧　秀弥[1]・児島　博紀[1]・多賀　秀紀[1]・西田谷　洋[1]・宮　一志[1]・宮城　信[1]・山根　拓[1]

The Report on the Achievement of School Internship in School of Education, University of Toyama

-Based on Questionnaire Survey in 2022-

Mina MASUDA, Miki WADA, Masanori KUBO, Atsushi SUMI, Josuke IKEDA, Hideaki ISHIKAWA, Takako ISOZAKI, Ikumi OZAWA, Hideo OYA, Akira KAMIYAMA, Tadayuki KISHIMOTO, Hideya GESSO, Hironori KOJIMA, Hidenori TAGA, Hiroshi NISHITAYA, Kazushi MIYA, Shin MIYAGI, Hiroshi YAMANE

Email:mmasuda@edu.u-toyama.ac.jp

[摘要]

本稿は，富山大学教育学部における選択必修科目である「学校インターンシップ」について，2022年度の取り組みを報告するものである。本学教育学部初年度生として入学した１年生が，「学校インターンシップ」での活動を通してどのような経験をし，何を学び得たのかについて，学生へのアンケート調査をもとに報告した。

キーワード：学校インターンシップ，教員養成，学級担任，特別支援教育

Keywords：School Internship, Teacher training, Classroom Teacher, Special Support Education

Ⅰ　はじめに

本稿は，富山大学教育学部１年次の選択必修科目である「学校インターンシップ」（以下，本講義）の 2022（令和４）年度成果報告である。本年 2023（令和５）年度より「学校体験活動」と名称変更された本講義は，2006（平成 18）年に始まった前身の「学級担任論」から，18 年間継続して実施されている科目である。教職志望の学生が教師の仕事を学校での実践の只中で理解することを目的に，これまで多くの学生が富山県内の公立小学校で教師の補助活動と児童の支援を行ってきた。

本学教育学部は，金沢大学人間社会学域学校教育学類との共同教員養成課程として改組され，2022年度より，教員を養成する学部として新たなスタートをきった。初年度は本講義の受講者数も増え，87名の１年生が受講した。そのうちの１名が金沢大学生であったことは，金沢大学と一つの教育課程として共同することとなった成果と言えよう。本稿では，教育学部初年度生として入学してきた１年生が，本講義を通してどのような経験し，何を学び得たのかについて，アンケート調査をもとに報告することが目的である。

本稿における著者の役割は，Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅴを増田が，Ⅳを増田と和田が執筆し，Ⅲのアンケート集計を久保と和田が担当した。また隅は，全体の内容

[1] 富山大学教育学部

についての議論に関与した。その他の著者は，本講義の実施と運営に参画した教員である。

Ⅱ　2022年度「学校インターンシップ」の概要

１．本講義の概要

「学校インターンシップ」は，「教員志望学生に実際の学級担任教師の日常的職務活動の具体的場面に即した学級担任としての学級経営のリアリティを獲得させるとともに，個々の子どもの学びや育ちを的確に理解し子どもに応じた適切な支援ができるようにする」ことを目標に実施される，通年の講義である。本講義創設の経緯は武田・多賀他（2021）に詳しいが，2015年に中教審答申において教職課程学生の学校現場へのインターンシップ導入が提言される約10年前から，富山県内公立小学校での体験活動を授業として実施してきた。活動を行う小学校までの県費による交通費負担等，富山県教育委員会との緊密な連携と協力ゆえに，ここまで継続実施が可能となっている。

通年での講義のなかで，学生は「学びのアシスト」コースと「スタディ・メイトジュニア」コースという２つのコースから，自分の関心に沿ったコースを選んで小学校での活動を行う。「学びのアシスト」コースは，学級担任として学級経営をどのように進めていくのかを理解することを重視したコースであり，学級の子どもたちの成長を願って学級経営案を構想し，責任をもって実施，評価，省察する学級担任の一連の諸活動の営みにアシスタント・ティーチャーとして参加し，教師の仕事を具体的に理解していくことを目指す。また，「スタディ・メイトジュニア」コースは，子どもの視点に立った特別支援とはどのようなものかを理解することを重視したコースで，特別な支援を必要とする子どもに寄り添いながら，個性や特徴を捉え，理解し，個に応じた適切な支援方法を学んでいくことを目指す。いずれのコースも，学校現場でボランティア教師として学級活動や子どもの支援活動に携わりながら，自らの教師としての資質能力の向上を主体的に図っていく姿勢が不可欠とされる学修である。

2022年度は，本学教育学部１年生は約96％にあたる86名が，金沢大学１年生は富山県出身の１名が受講した。受講者のうち，「学びのアシスト」コースに参加したのは72名，「スタディ・メイトジュニア」コースに参加したのは15名である。これらの参加学生は，「学びのアシスト」コースは富山県内７市町村の37の小学校に，「スタディ・メイトジュニア」コースは同県内４市町村の15の小学校に，2022年度は配置された。

２．１年間の講義と活動の内容

ここでは，2022年度の講義と活動の内容を簡単に説明したい。

本講義は通年の授業であり，各小学校での実習活動が主であるが，入学した４月から７月の間は大学において大学教員より学校教育にまつわる様々について講義を受ける。その後，９月から翌年２月までは２つのコースに分かれ，毎週一日[1]，配置された小学校で実習を行うというスケジュールである。（図１）

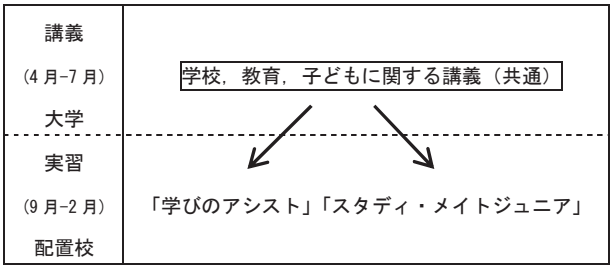

図１　「学校インターンシップ」の流れ

2022年度は教育学部として再スタートを切ったことふまえ，７月までの例年の講義内容を見直し，以下のように充実させた。

＜第１クォーター（４～６月）＞
第１回　学校インターンシップとは
第２回　学級担任の役割と活動
第３回　学級経営の意義と方法
第４回　学級経営と子ども理解
第５回　学級経営と保護者との関係づくり
第６回　子どもの見方・とらえ方
第７回　支援を要する子どもの理解
第８回　発達障害のある子どもの理解と支援

＜第２クォーター（６～７月）＞
第１回　授業の見方・とらえ方
第２回　子どもを取りまくICT環境の課題
第３回　海外にルーツをもつ子どもの理解
第４回　学習における子どものつまずきの見取り
第５回　授業づくりにおける板書の役割

第６回　学校での服務について（県教委）
第７回　学校の危機管理

これらの講義を，大学教員それぞれの専門分野に応じてオムニバス形式で進めた。第２クォーター第６回の「学校での服務について」は，富山県教育委員会指導主事からの講話となっている。こうした７月までの講義のなかで，学生は実際に小学校で活動を開始する前に理解しておくべき内容を学び，同時に，児童生徒としてではなく教師として学校教育を見つめ直す必要性も学ぶことができる講義の流れとなっている。

９月以降の実習開始後も，本学 LMS（Learning Management System）の Moodle を通して毎週の実習後に担当教員に活動報告を行わせ，問題や不安を抱えながら実習を続けることがないよう，学生を支援した。また，10 月と 12 月，２月には報告会を実施し，学生同士が日頃の実習活動での様子や子どもたちとの関わりについて語り合うことを通して，喜びや悩みを共有し，大学教員もアドバイスを行う機会を設けた。武田・多賀他（2021）にも指摘されているように，実際に小学校での活動を行いながら，学生たちが省察するこうした機会は，大学での理論を通した学びと，配置された小学校での実践経験に基づいた学びとを結びつける良い契機となったと考えられる。

Ⅲ　学生へのアンケート調査の実施

以下，2022 年度「学校インターンシップ」において実施した学生へのアンケート調査の集計結果を報告する。本節ではなかでも，多項選択法による質問の集計結果をとり上げたい。自由記述欄への学生の記述内容については，次節にて示す。

１．調査対象と調査方法

調査対象は，2022 年度「学校インターンシップ」を受講した本学教育学部 86 名と金沢大学１名の学生である。うち,「学びのアシスト」コースは 72 名,「スタディ・メイトジュニア」コースは 15 名である。

調査は同年 10 月 27 日と 12 月 22 日，翌年２月 16 日の報告会において合計３度実施し，〔受講・活動の動機について〕〔活動の状況について〕〔Moodle での活動報告について〕〔教員志望について〕の４観点から，多項選択法による質問紙調査を行った。多項選択法による質問項目の全体は，論文末尾に補助資料として示す。また，質問紙の最後に，感想や意見を自由に記述する自由記述欄も設けた。

なお，本アンケート調査は，学生の活動状況や意識の変化等について大学教員が把握するとともに，学生自身の振り返りを促すことを目的として，例年，各報告会で実施しているものである。

２．集計結果

（１）受講・活動の動機について

まず，本講義を受講した動機を見てみたい。

ⅰ　将来，教師になりたいと思っているので

	選択肢・内容	学びのアシスト	ｽﾀﾃﾞｨ･ﾒｲﾄｼﾞｭﾆｱ
①	とても	27 名(37%)	4 名(27%)
②	思っている	33 名(45%)	6 名(40%)
③	少し	12 名(17%)	5 名(33%)
④	思っていない	1 名(1%)	0 名(0%)

ⅱ　子どもが好きなので

	選択肢・内容	学びのアシスト	ｽﾀﾃﾞｨ･ﾒｲﾄｼﾞｭﾆｱ
①	とても	35 名(48%)	9 名(60%)
②	好き	29 名(40%)	5 名(33%)
③	少し	9 名(12%)	1 名(1%)
④	好きでない	0 名(0%)	0 名(0%)

ⅲ　学校や教師の仕事を体験したいと思ったので

	選択肢・内容	学びのアシスト	ｽﾀﾃﾞｨ･ﾒｲﾄｼﾞｭﾆｱ
①	とても	43 名(59%)	10 名(67%)
②	思った	24 名(33%)	4 名(27%)
③	少し	6 名(8%)	1 名(7%)
④	思っていない	0 名(0%)	0 名(0%)

ⅳ　新入生オリエンテーションでの話を聞いて興味をもったので

	選択肢・内容	学びのアシスト	ｽﾀﾃﾞｨ･ﾒｲﾄｼﾞｭﾆｱ
①	とても	11 名(15%)	6 名(40%)
②	もった	35 名(48%)	4 名(27%)
③	少し	22 名(30%)	5 名(33%)
④	もたなかった	5 名(7%)	0 名(0%)

v　友人に一緒にやろうと勧められたので

	選択肢・内容	学びのアシスト	ｽﾀﾃﾞｨ･ﾒｲﾄﾞｼﾞｭﾆｱ
①	とても	3 名(4%)	0 名(0%)
②	勧められた	17 名(23%)	1 名(7%)
③	少し	10 名(14%)	3 名(20%)
④	まったくない	43 名(59%)	11 名(73%)

vi　小学校での児童との活動が楽しそうだったので

	選択肢・内容	学びのアシスト	ｽﾀﾃﾞｨ･ﾒｲﾄﾞｼﾞｭﾆｱ
①	とても	29 名(40%)	9 名(60%)
②	楽しそうだった	37 名(51%)	3 名(20%)
③	少し	6 名(8%)	3 名(20%)
④	楽しそうでない	1 名(1%)	0 名(0%)

「i　将来, 教師になりたいと思っているので」「ii 子どもが好きなので」「iii　学校や教師の仕事を体験したいと思ったので」「vi　小学校での児童との活動が楽しそうだったので」の項目で，①②の割合が多い結果となった。「i　将来，教師になりたいと思っているので」の項目の結果からも明らかなように，教職を目指していたり，興味をもっている学生がほとんどであるゆえと考えられる。

（2）活動の状況について

次に，配置された小学校での実習回数および活動時間を以下に示す。

i　配置校での実習回数[2]

	学びのアシスト				ｽﾀﾃﾞｨ･ﾒｲﾄﾞｼﾞｭﾆｱ			
	10/27	12/22	2/16	年間	10/27	12/22	2/16	年間
平均回	8.3	5.8	5.3	19.0	8.7	5.8	5.4	19.9
最大回	11	8	7	22	14	7	8	27
最小回	5	4	2	13	6	4	4	17

ii　配置校での活動時間[2]

	学びのアシスト				ｽﾀﾃﾞｨ･ﾒｲﾄﾞｼﾞｭﾆｱ			
	10/27	12/22	2/16	年間	10/27	12/22	2/16	年間
平均時間	56.8	39.4	35.9	131.0	56.8	37.3	36.7	130.9
最大時間	77	56	46.5	173.5	101.5	49.5	56.0	192.5
最小時間	37.5	19	12	90	21.0	22.0	16.0	73.5

両コースともに，平均すると年間約 19 回，約 131 時間を小学校で活動したことが分かった。1 回の活動時間が平均 7 時間弱ということになる。学生たちの多くは，児童が登校し下校するまで小学校に滞在し，学校での児童と教師の一日の暮らしを体験する。そうした長時間の体験が可能となっているのは，本学教育学部 1 年生の 10 月以降のカリキュラムとして，本講義の活動のために他の講義を入れない日を週一日設けているためである。本講義の目標である「学級担任教師の日常的職務活動の具体的場面に即した学級担任としての学級経営のリアリティ」を，毎週一回，丸一日小学校で体験活動を積み重ねることで学修することができるカリキュラム編成と言える。

また，配置された小学校での具体的な活動内容を明らかにするために，以下の 8 項目について調査を行った。

i　授業での学習指導の補助

	学びのアシスト			ｽﾀﾃﾞｨ･ﾒｲﾄﾞｼﾞｭﾆｱ		
	10/27	12/22	2/16	10/27	12/22	2/16
とても多い	40 名(55%)	41 名(57%)	43 名(62%)	10 名(67%)	11 名(73%)	12 名(80%)
かなりあった	29 名(40%)	26 名(36%)	24(34%)	4 名(27%)	4 名(27%)	2 名(13%)
少なかった	4 名(5%)	5 名(7%)	3(4%)	1 名(7%)	0 名(0%)	1 名(7%)
なし	0 名(0%)	0 名(0%)	0(0%)	0 名(0%)	0 名(0%)	0 名(0%)

ii　指導教諭の仕事補助（採点，教材作成等の手伝い）

	学びのアシスト			ｽﾀﾃﾞｨ･ﾒｲﾄﾞｼﾞｭﾆｱ		
	10/27	12/22	2/16	10/27	12/22	2/16
とても多い	7 名(10%)	7 名(10%)	15 名(21%)	4 名(27%)	0 名(0%)	2 名(13%)
かなりあった	16 名(22%)	28 名(39%)	21 名(30%)	5 名(33%)	7 名(47%)	4 名(27%)
少なかった	38 名(52%)	32 名(44%)	29 名(42%)	4 名(27%)	7 名(47%)	7 名(47%)
なし	12 名(16%)	5 名(7%)	5 名(7%)	2 名(13%)	1 名(7%)	2 名(13%)

iii　放課後の学習指導（児童への個別指導）

	学びのアシスト			ｽﾀﾃﾞｨ･ﾒｲﾄﾞｼﾞｭﾆｱ		
	10/27	12/22	2/16	10/27	12/22	2/16
とても多い	1 名(1%)	2 名(3%)	3 名(4%)	0 名(0%)	2 名(13%)	0 名(0%)
かなりあった	1 名(1%)	6 名(8%)	5 名(7%)	0 名(0%)	0 名(0%)	2 名(13%)
少なかった	15 名(21%)	13 名(18%)	15 名(22%)	1 名(7%)	0 名(0%)	2 名(13%)
なし	55 名(77%)	51 名(71%)	41 名(67%)	14 名(93%)	13 名(87%)	11 名(73%)

iv　児童の相談・遊び相手

	学びのアシスト			ｽﾀﾃﾞｨ･ﾒｲﾄﾞｼﾞｭﾆｱ		
	10/27	12/22	2/16	10/27	12/22	2/16
とても多い	49 名(67%)	53 名(74%)	57 名(81%)	13 名(87%)	10 名(67%)	12 名(80%)
かなりあった	18 名(25%)	15 名(21%)	11 名(16%)	2 名(13%)	3 名(20%)	2 名(13%)
少なかった	6 名(8%)	3 名(4%)	2 名(3%)	0 名(0%)	2 名(13%)	1 名(7%)
なし	0 名(0%)	1 名(1%)	0 名(0%)	0 名(0%)	0 名(0%)	0 名(0%)

v　学校内や教室の環境整備（清掃活動等）

	学びのアシスト			ｽﾀﾃﾞｨ･ﾒｲﾄﾞｼﾞｭﾆｱ		
	10/27	12/22	2/16	10/27	12/22	2/16
とても多い	21 名(29%)	21 名(29%)	23 名(33%)	5 名(33%)	1 名(7%)	5 名(33%)
かなりあった	29 名(40%)	28 名(39%)	27 名(39%)	4 名(27%)	9 名(60%)	5 名(33%)
少なかった	20 名(27%)	22 名(31%)	19 名(27%)	4 名(27%)	5 名(33%)	5 名(33%)
なし	3 名(4%)	1 名(1%)	1 名(1%)	2 名(13%)	0 名(0%)	0 名(0%)

vi　学級活動や学校行事等のクラス指導の手伝い

	学びのアシスト			ｽﾀﾃﾞｨ･ﾒｲﾄｼﾞｭﾆｱ		
	10/27	12/22	2/16	10/27	12/22	2/16
とても多い	16 名(22%)	7 名(10%)	13 名(19%)	4 名(27%)	4 名(27%)	6 名(40%)
かなりあった	30 名(41%)	32 名(44%)	28 名(40%)	7 名(47%)	4 名(27%)	4 名(27%)
少なかった	25 名(34%)	29 名(40%)	27 名(38%)	4 名(27%)	7 名(47%)	5 名(33%)
なし	2 名(3%)	4 名(6%)	2 名(3%)	0 名(0%)	0 名(0%)	0 名(0%)

vii　校内活動の行事･大会等（全体練習，準備を含む）

	学びのアシスト			ｽﾀﾃﾞｨ･ﾒｲﾄｼﾞｭﾆｱ		
	10/27	12/22	2/16	10/27	12/22	2/16
とても多い	14 名(19%)	3 名(4%)	4 名(6%)	3 名(20%)	2 名(13%)	3 名(20%)
かなりあった	29 名(40%)	17 名(24%)	20 名(28%)	2 名(13%)	3 名(20%)	1 名(7%)
少なかった	21 名(29%)	39 名(54%)	35 名(50%)	8 名(53%)	8 名(53%)	8 名(53%)
なし	9 名(12%)	13 名(18%)	11 名(16%)	2 名(13%)	2 名(13%)	3 名(20%)

viii　校外活動の行事･大会等（全体練習，準備を含む）

	学びのアシスト			ｽﾀﾃﾞｨ･ﾒｲﾄｼﾞｭﾆｱ		
	10/27	12/22	2/16	10/27	12/22	2/16
とても多い	5 名(7%)	1 名(1%)	1 名(1%)	0 名(0%)	0 名(0%)	0 名(0%)
かなりあった	8 名(11%)	5 名(7%)	6 名(9%)	2 名(13%)	0 名(0%)	0 名(0%)
少なかった	11 名(15%)	16 名(22%)	25 名(36%)	3 名(20%)	2 名(13%)	6 名(40%)
なし	49 名(67%)	50 名(70%)	38 名(54%)	10 名(67%)	13 名(87%)	9 名(60%)

「とても多い」と「かなりあった」の割合の合計が 90％を超えるのは，「ⅰ　授業での学習指導の補助」と「ⅳ　児童の相談・遊び相手」であることが分かる。

さらに，上記８項目の活動内容に対する学生の満足度について尋ねたところ，以下のような回答を得た。

	学びのアシスト			ｽﾀﾃﾞｨ･ﾒｲﾄｼﾞｭﾆｱ		
	10/27	12/22	2/16	10/27	12/22	2/16
おおいに満足	53 名(73%)	50 名(70%)	58 名(83%)	14 名(93%)	12 名(80%)	14 名(93%)
まあまあ満足	19 名(26%)	21 名(29%)	11 名(16%)	1 名(7%)	3 名(20%)	1 名(7%)
やや不満	1 名(1%)	1 名(1%)	1 名(1%)	0 名(0%)	0 名(0%)	0 名(0%)
まったく不満	0 名(0%)	0 名(0%)	0 名(0%)	0 名(0%)	0 名(0%)	0 名(0%)

「おおいに満足」と「まあまあ満足」が 99％を超え，ほとんどの学生が満足していたことが読み取れる。

また，配置された小学校での人間関係についても調査を行った。

ⅰ　子どもたちとの人間関係

	学びのアシスト			ｽﾀﾃﾞｨ･ﾒｲﾄｼﾞｭﾆｱ		
	10/27	12/22	2/16	10/27	12/22	2/16
とてもよい	52 名(73%)	57 名(79%)	57 名(81%)	10 名(67%)	12 名(80%)	15 名(100%)
よい	18 名(25%)	15 名(21%)	13 名(19%)	5 名(33%)	3 名(20%)	0 名(0%)
少し困っている	2 名(3%)	0 名(0%)	0 名(0%)	0 名(0%)	0 名(0%)	0 名(0%)
困っている	0 名(0%)	0 名(0%)	0 名(0%)	0 名(0%)	0 名(0%)	0 名(0%)

ⅱ　配置校の担任の先生との人間関係

	学びのアシスト			ｽﾀﾃﾞｨ･ﾒｲﾄｼﾞｭﾆｱ		
	10/27	12/22	2/16	10/27	12/22	2/16
とてもよい	56 名(77%)	57 名(78%)	58 名(83%)	12 名(80%)	14 名(93%)	14 名(93%)
よい	16 名(22%)	14 名(20%)	12 名(17%)	3 名(20%)	1 名(7%)	1 名(7%)
少し困っている	1 名(1%)	1 名(1%)	0 名(0%)	0 名(0%)	0 名(0%)	0 名(0%)
困っている	0 名(0%)	0 名(0%)	0 名(0%)	0 名(0%)	0 名(0%)	0 名(0%)

ⅲ　配置校の指導の先生や校長先生との人間関係

	学びのアシスト			ｽﾀﾃﾞｨ･ﾒｲﾄｼﾞｭﾆｱ		
	10/27	12/22	2/16	10/27	12/22	2/16
とてもよい	50 名(68%)	56 名(78%)	56 名(80%)	11 名(73%)	13 名(87%)	14 名(93%)
よい	23 名(32%)	16 名(22%)	14 名(20%)	4 名(27%)	2 名(13%)	1 名(7%)
少し困っている	0 名(0%)	0 名(0%)	0 名(0%)	0 名(0%)	0 名(0%)	0 名(0%)
困っている	0 名(0%)	0 名(0%)	0 名(0%)	0 名(0%)	0 名(0%)	0 名(0%)

「ⅰ　子どもたちとの人間関係」や「ⅱ　配置校の担任の先生との人間関係」で，12 月までの段階で「少し困っている」と回答した学生が若干名いることが分かる。そうした学生には，Moodle やメールを通して相談することを促したり，希望する場合は個別に面談を行ったり等，活動のサポートを行い続けた。

（3）Moodle での活動報告について

そのサポートに関する調査報告を次に示したい。本講義では，「学びのアシスト」コースは退職校長の客員教授，「スタディ・メイトジュニア」コースは５名の大学教員によって，活動期間中の学生を Moodle を通して個別にサポートするシステムを採っている。学生には，実習に赴いた日は Moodle に活動報告を書き込むよう指導した。アンケートでは，（ⅰ）Moodle での活動報告を，活動内容や気付きを記録し，学びを深めるために活用したかということと，（ⅱ）Moodle での報告に対する大学教員からの返信は，配置された小学校での活動に対する相談や学びのために役立っているかということについて尋ね，その回答は以下の通りであった。

ⅰ　Moodle での活動報告の活用状況

	学びのアシスト			ｽﾀﾃﾞｨ･ﾒｲﾄｼﾞｭﾆｱ		
	10/27	12/22	2/16	10/27	12/22	2/16
大いに	30 名(41%)	36 名(50%)	37 名(53%)	13 名(87%)	13 名(87%)	11 名(73%)
まあまあ	36 名(50%)	26 名(36%)	23 名(33%)	2 名(13%)	2 名(13%)	4 名(27%)
あまり	6 名(8%)	8 名(11%)	8 名(11%)	0 名(0%)	0 名(0%)	0 名(0%)
まったく	1 名(1%)	2 名(3%)	2 名(3%)	0 名(0%)	0 名(0%)	0 名(0%)

ⅱ　Moodle によるサポートの有用感

	学びのアシスト			ｽﾀﾃﾞｨ･ﾒｲﾄｼﾞｭﾆｱ		
	10/27	12/22	2/16	10/27	12/22	2/16
大いに	46 名(63%)	57 名(79%)	52 名(74%)	9 名(60%)	10 名(67%)	8 名(53%)
まあまあ	24 名(33%)	12 名(17%)	14 名(20%)	5 名(33%)	4 名(27%)	4 名(27%)
あまり	2 名(3%)	2 名(3%)	4 名(6%)	1 名(7%)	1 名(7%)	3 名(20%)
まったく	1 名(1%)	1 名(1%)	0 名(0%)	0 名(0%)	0 名(0%)	0 名(0%)

活用状況と有用感ともに，「学びのアシスト」コースに「あまり」と「まったく」と回答した学生が若干名いる。毎回の活動後に義務的に報告するのではなく，活動を振り返って言葉にすることによって学

びを深めることができることに学生自身が気づくよう，大学教員が働きかけ続けることが今後の課題と言える。

（4）教員志望について

アンケート調査では，教師を志望する気持ちの度合いについても調査し，以下のように回答を得た。

学びのアシスト	4月当初	10/27	12/22	2/16
ぜひなりたい	35名(48%)	36名(50%)	38名(53%)	37名(53%)
できればなりたい	21名(29%)	24名(33%)	20名(28%)	19名(27%)
迷っている	15名(21%)	11名(15%)	12名(17%)	11名(16%)
あまりなりたくない	1名(1%)	1名(1%)	1名(1%)	2名(3%)
まったくなりたくない	1名(1%)	1名(1%)	1名(1%)	1名(1%)

スタディ・メイトジュニア	4月当初	10/27	12/22	2/16
ぜひなりたい	6名(40%)	5名(33%)	6名(40%)	7名(47%)
できればなりたい	4名(27%)	4名(27%)	4名(27%)	3名(20%)
迷っている	4名(27%)	6名(40%)	5名(33%)	5名(33%)
あまりなりたくない	1名(7%)	0名(0%)	0名(0%)	0名(0%)
まったくなりたくない	0名(0%)	0名(0%)	0名(0%)	0名(0%)

４月当初と学年末の２月を比べても大きな変化は見られないが，「先生」と呼ばれる立場から教師の仕事の実際を体験することを通して展望した回答であることに意味があると言えよう。

では，具体的に本講義を受講した学生は，教師の仕事について何を学び得たのかについて，学生自身の言葉を紹介しながら，次節で報告する。

Ⅳ　受講生の学びの姿

ここでは，質問紙の自由記述欄に記載された学生の記述と，一年の最後に各学生が執筆した『令和４年度「学校インターンシップ」報告書　先生になりたい！！』（以下，『報告書』）における記述の一部を抜粋し，本講義を通した具体的な学生の学びの姿を紹介したい。

質問紙調査は小学校での活動期間中に実施されたため，活動中の学生の記述である。また，『報告書』は，本講義を通した一年間の学びについて各学生がＡ４用紙一枚にまとめ，それを製本したものであるため，活動終了時に省察した記述である。ゆえに，以下，質問紙の自由記述欄への記述は「活動中の学生の学び」として，『報告書』の記述は「活動を振り返っての学生の学び」として紹介する。

１．活動中の学生の学び

まず，配置された小学校での活動期間中に実施した，10月27日と12月22日の質問紙における自由記述を見てみたい。「学びのアシスト」コース，「スタディ・メイトジュニア」コースともに，学生の記述は概ね，＜現場の教師からの学び＞，＜子どもたちからの学び＞，＜Moodleを通した活動報告や大学での報告会の意義＞の３点についての内容であった。

＜現場の教師からの学び＞

授業について

・先生の声掛けや授業の進め方など，勉強するところがたくさんあり，毎週刺激を受けている。
・算数，理科での指導の方法や子どものほめ方や注意の仕方など学べることが多いので，実習中にできるだけ担任の先生から学んでいきたいです。
・学生と教員の目線が全く違っていた。授業もねらいをもって行っていた。
・先生方はどんな視点で他の授業を観ているのだろうと思った。
・授業を日常生活に結びつける大切さを感じている。昼休みや給食も大切な学びの時間である。

子どもへの関わり方について

・甘える子どもに強く言えていませんでしたが，これからは子どもの特性を考えて，一人ひとりに合った形で支援をしていこうと思います。担当の先生に「この子は淡々と接することも必要だから」と言われた子には，そのように接してみようと思います。
・はじめは不安なことばかりだったが，先生から学ぶことがとても多く，子どもとの関わり方や接し方などが分かってきたと思う。

教職について

・長期間現場に行って学ぶことができる貴重な体験だった。「教師」という仕事の面白さを再認識することができた。
・配置校の先生の言動一つ一つが本当に参考になり学びが多いので，とても良い実習になっています。
・丸付けなどの活動を行って，授業以外の作業にも多くの時間を費やしていることを実感した。

その他

・この活動を通して小学校の先生という選択肢も増えました。

・学校中の先生方にたくさん「ありがとう」を言っていただき，未熟者でも先生方のお役に立っていると感じ嬉しく思う。

＜子どもたちからの学び＞
・様々な子どもたちとの接し方を学んで実践できるところがよかった。少しずつ上手な声掛けができ，子どもとの距離が近くなった。
・子どもたちのいろいろな様子，考えに触れることができて，とても素晴らしい経験ができていると思う。
・児童と本格的にかかわることができ，大変なこともあるがかなり楽しい。通常級の中にいる支援が必要な児童へのかかわりなど，学ぶことがたくさんあって毎日が新鮮。
・授業中，静かに泣いていた子に気づかなかったので，視野を広くして活動したい。
・子どもたちと触れ合うことは時に自分の不出来さにがっかりすることにもなりますが，それでも子どもたちの笑顔を見ると疲れや悩みが飛んでしまいます。子どもたちからパワーをもらっていると感じながら活動しています。
・児童の接し方の難しさ，児童の成長を身近に感じられる良さを実感した。児童の成長を見守れることが教員のやりがいだと思った。
・10月までの自分をアップグレードして，子どもたちとのつながりを深めることができたと思う。

＜ Moodle を通した活動報告や大学での報告会の意義＞
Moodle を通した活動報告について
・毎回，実習録やMoodleの報告を通して自分の活動の振り返りや反省ができる機会があってとても嬉しい。
・担任の先生やMoodleでのやり取りで何倍も学びが深まるように感じる。
・気軽にMoodleに書いて相談できたので，ありがたかった。
大学での報告会について
・中間報告会では実際にできることが増えてきたり，他の小学校での良い経験を聞くことができたりしたので，さらに教師を目指すモチベーションが高まった。
・報告会は問題や悩みを共有できてよいと感じた。
・児童への接し方や注意の仕方で困っているのは自分だけではないことが分かり安心した。
・（前回の）報告会から子どもたちとの関わりを楽しむことを意識したことで，教師としての立場で関わることができた。
・前回の報告会から比べても自分の成長を感じた。残りも自分の成長のために頑張りたい。

以上の学生の記述から，活動期間中の学生の学びとして，次の３点を指摘することができる。

まず，現場の教師たちの授業実践から多くを学ぼうとしている点である。授業の進め方や指導方法についての記述が多いが，単に方法論として学びとろうとするのではなく,「学生と教員の目線が全く違っていた」,「先生方はどんな視点で他の授業を観ているのだろう」といった記述に表れているように，教師がとる方法論の背景にある教師のものの見方や鑑識眼に思いを及ばせる学生もいたことは，注目に値する。

次に，出会った子どもたちの姿から学ぼうとする学生が多かった点である。「様々な子どもたちとの接し方を学んで実践できるところがよかった。少しずつ上手な声掛けができ，子どもとの距離が近くなった」,「授業中，静かに泣いていた子に気づかなかったので，視野を広くして活動したい」といった記述からは,多様な子どもたちの様子や考えにふれ,応じる自分の成長や至らなさも感じながらの活動であったことが分かる。

最後に，Moodle を通した活動報告や大学での報告会を，それぞれの学生がニーズに合わせて自分なりに活用していた点である。日頃の活動での悩みを相談できたり，他の小学校での実習経験を共有することに意味を見出したり，また，振り返ることで自分の学びを自覚できることに意味を見出している学生が多いことが分かった。

その他，上記の学生の記述には挙げなかったが,「今まで講義で学んだことが実際に体験できてとても勉強になっている」,「大学の講義で紹介されたこと，視点を即現場で見ることができ，とても身になると感じている」といった記述あった。そうした記述からは，大学で学ぶ理論と実践の場で得る経験をつなげながら活動に取り組む様子が見てとれる。教員養成のスタート時である大学１年生から，理論と実践の往還のなかで教師の専門性を高める重要性に

気づくことができる活動となっていることが分かる。

２．活動を振り返っての学生の学び

次に，小学校での活動期間終了時に，一年間の学びについて振り返りながら執筆した，『報告書』における学生の記述を紹介する。

（1）「学びのアシスト」コース学生の学び

①受講生Ａ

「学びのアシスト」の活動を通して最も難しかったのは，児童が「出来ること」と「出来ないこと」の境目を判断した上での対応が求められるという点です。児童たちは自分の想像以上に「出来ること」が多く，成長の過程で最初は出来なかったことが出来るようになった場面も多々あったため，その変化に応じて児童ごとに毎回対応を変えていくことに苦戦しました。そんな時に担任の先生から，「少し離れたところから児童たちの様子を観察してみるといいよ」という言葉をかけていただきました。それを実践に移してみると，「Ａ君は自分の考えを友だちに伝えるのが得意」といったことや，「Ｂさんは友達の話を真剣に聴くことが出来る」ということに気づくことができました。

②受講生Ｂ

クラスには，ノートをとったり集中して授業を受けることは難しいが，自分の好きなことに対しては人一倍熱心だったり，授業中にふざけてしまうことは多いが，テスト前の勉強を頑張ったり，自主勉強に誰よりもたくさん取り組んでいたりと，様々な個性や良いところをもった児童がたくさんいました。こういった子どもたちの良いところを伸ばし，子どもたちが自信をもっていけるような指導や声掛けをしていくことが大事だと学びました。

③受講生Ｃ

この実習を通して，半年という長いようであっという間の期間でたくさんのことを学ぶことができました。特に，全部教えてあげることが先生のすることではないということを強く感じました。子どもたちが自分で悩んで，考えて，それでもダメだった時に少しだけ手助けをしてあげることが先生として必要なことであると学びました。子どもたちの成長を上手にサポートしてあげられる先生になれるように，これからも頑張っていきたいと思います。

（2）「スタディ・メイトジュニア」コース学生の学び

①受講生Ｄ

活動をとおして，３つの支援方法を学びました。「言葉で指示をする支援」「見本を示す支援」「直接手を添えて誘導する支援」の３つです。

９月は運動会の応援練習に参加しました。そのなかで，Ａさんは，「手をあげるよ」や「しゃがむよ」の声掛けだけではなかなかうまく伝わりませんでした。上記の３つ目の方法を先生に教えていただき実践すると，うまく指示が伝わるようになりました。そして，直接手を添えなくても声掛けだけでだんだんと振り付けができるようになっていきました。

子どもにとって「分かりやすい」というのは，ただ単に中身や過程が明確で具体的であるだけではなく，その子にとってより理解しやすい方法が用いられていることが重要だと分かりました。

②受講生Ｅ

支援級では，「できないこと，難しいこと」があるときに周囲の人に助けを求めることも学習の一環としています。とてもシャイな子どもが多く，周りに頼るのが苦手な子は，先生の考えた文章を読んで練習をすることも大切な自立活動の学習です。

私が関わった中で，なかなか素直に言い出せない子どもも，普段から「甘えたい」「話したい」と思っているようでした。ためこんでしまわないよう，些細な表情の変化や抑揚で気持ちの浮き沈みを察知し，伝えるきっかけを作ってあげることが大切だと分かりました。

③受講生Ｆ

交流級でサポートした子どもたちの多くは黒板に書いてある文字をノートに写すことを苦手としていました。

そこで，いつも持ち歩いているノートに黒板の内容を書き写し，子どものノートの近くに置き，「この内容を書いてね」と伝えると書いてくれたり，書けるようになったりする子どもが多くいました。

何気ない工夫ひとつで，子どもの「苦手」が「できる」に変わるのだと実感しました。これからも，

子どもの「できた」を実現する支援をしていきたいです。

以上の学生６名の記述からは，活動を振り返っての学びとして，次の２点を指摘することができる。

まず，一年間の活動を振り返って自分の学びを文章化する作業を通して，これまで得た具体的な学びを俯瞰的に捉えることができている点である。例えば，受講生ＤはＡさんの事例を通して，「子どもにとって『分かりやすい』というのは，ただ単に中身や過程が明確で具体的であるだけではなく，その子にとってより理解しやすい方法が用いられていることが重要だと分か」ったと述べ，子どもにとっての「分かりやすさ」と何かについての理解を得ている。また，受講生Ａは，「少し離れたところから児童たちの様子を観察してみるといい」という担任教師の助言から，子どもに寄り添う教師に必要な視点のもち方を学び得ている。俯瞰的に捉えることで得たこれらの学びは，彼ら彼女らの今後の教職の糧になるだけではなく，大学２年生以降により専門的になる理論の理解の助けにもなると考えられる。

次に，一年間の活動を振り返ることで，これからどのような教師になっていきたいかという展望を具体的に見出している点である。受講生Ｃは，すべてを教えることが教師の仕事ではなく，子どもの歩みに添って機を捉えた支援をすることが教師の仕事であるという学びから，「子どもたちの成長を上手にサポートしてあげられる先生になれるようにこれからも頑張っていきたい」と述べている。また，受講生Ｆは，「何気ない工夫ひとつで，子どもの『苦手』が『できる』に変わるのだ」という実感から，「これからも，子どもの『できた』を実現する支援をしていきたい」と述べている。教職に対する漠然とした憧れをもって教育学部に入学する学生にとって，経験を通して展望を具体化できる意味は大きいのではないだろうか。

Ⅴ　最後に

以上，本学教育学部初年度生として入学してきた１年生が，本講義を通してどのような経験し，何を学び得たのかについて報告してきた。

先にも述べたように，本講義は前身の人間発達科学部より，18 年間継続して実施されている講義である。人間発達科学部の頃は１年生の約 40 ～ 50％の受講率であったが，教育学部初年度の 2022 年度も今年度 2023 年度も，96％以上の受講率である。入学生には，本講義の活動を知って本学に入学を決めた学生もいる。本講義を通して上述の学びを得ている学生たちのために，さらなる充実を図りながら本講義を継続する必要があると考える。

継続には，大学の努力だけではなく，富山県教育委員会や県内市町村教育委員会との協力が欠かせない。本講義は，各教育委員会の尽力で成り立っている側面が強い。2022 年度以降，受講者数が増加したことに伴って，大学より遠方にある，ある市の教育委員会が急遽，特別に予算を組み，最寄り駅からのタクシー代金の市費負担を決定，多くの学生を受け入れてくださった。有り難い限りである。地域で活躍する教師を育成するという目的を共有し，今後も各教育委員会との連携を深めていきたい。

最後に，＜活動中の学生の学び＞として先に挙げた,「学校中の先生方にたくさん『ありがとう』を言っていただき，未熟者でも先生方のお役に立っていると感じ嬉しく思う」という学生の記述にもあるように，配置された小学校の教師たちのかかわりと指導ゆえに，学生は活動を続けることができ，学びも深めることができていることが，今回の調査をまとめるなかでも明らかとなった。学校現場での活動を通して得た経験を各学生が教職に就いて活かしていくことができるよう，学生たちの大学での学修を今後も支援したい。

謝辞

本講義の実施にあたり，本学教育学部学生を受け入れてくださった配置小学校の皆さまと富山県教育委員会，県内市町村教育委員会に，この場を借りて厚く御礼申し上げます。

参考引用文献

武田裕司，多賀秀紀，他（2021）：富山大学における学校インターンシップ事業の成果と課題 － 2020 年度実施アンケート調査をてがかりとして－．富山大学人間発達科学部紀要，16（1），111-118.

本多信昭，黒羽正見，田尻信壹，松本謙一（2008）：学びのアシスト活動におけるＥ－メール活用相談の実践と評価 －大学生による学級担任支援活動の円滑な推進を目指して－．富山大学人間発

達科学研究実践センター紀要 教育実践研究，3，79-91.
水内豊和，角地里香（2014）：小学校における学生支援員の経験がその後のキャリア形成に及ぼす影響 －富山県におけるスタディ・メイトジュニア学生に対する質問紙調査から－．富山大学人間発達科学部紀要，9（1），297-301.

注

1　休日の学校行事に参加したり，大学長期休暇中は週二日以上の活動に参加することも可能である。

2 「10/27」の欄は初日～10/27,「12/22」の欄は10/28～12/22,「2/16」の欄は12/23～2/16の期間中の実習回数と活動時間を示す。

付記

アンケート調査で得られる回答の報告のための使用については，質問紙上で受講生に了承を得た。

また，『令和４年度「学校インターンシップ」報告書　先生になりたい！！』の内容を抜粋して転載するにあたっては，受講生本人の承諾を得た。

補助資料（アンケート調査項目）

[受講の動機について]

1．あなたが「学校インターンシップ」を受講し,「学びのアシスト」,「スタディ・メイトジュニア」として小学校で活動しようと思った理由について質問します。

ⅰ　将来，教師になりたいと思っているので
（1とても　2思っている　3少し　4思っていない）

ⅱ　子どもが好きなので
（1とても　2好き　3少し　4好きでない）

ⅲ　学校や教師の仕事を体験したいと思ったので
（1とても　2思った　3少し　4思っていない）

ⅳ　新入生オリエンテーションでの話を聞いて興味をもったので
（1とても　2もった　3少し　4もたなかった）

ⅴ　友人に一緒にやろうと勧められたので、
（1とても　2勧められた　3少し　4まったくない）

ⅵ　小学校での児童との活動が楽しそうだったので
（1とても　2楽しそうだった　3少し　4楽しそうでない）

[教員の志望について]

2．「学校インターンシップ」および「学びのアシスト」「スタディ・メイトジュニア」は，将来，教員を目指す学生のために設けられたプログラムです。大学入学時（４月当時）のあなたの教員志望に対する気持ちを，下の語群から記号で選んでください。

1 ぜひなりたい　2 できればなりたい
3 迷っている　4 あまりなりたくない
5 まったくなりたくない（ならない）

3．現在のあなたの教員志望に対する気持ちを，下の語群から記号で選んでください。

1 ぜひなりたい　2 できればなりたい
3 迷っている　4 あまりなりたくない
5 まったくなりたくない（ならない）

[活動状況について]

4．あなたは，現在，配置校に何回，出かけましたか。

5．あなたは，現在，配置校での活動時間は延べ何時間になりましたか。（正確な時間が分からない場合は，おおよその時間でよい。時間は0.5時間区切りで，20時間，20.5時間のように記入。）

6．あなたは，配置校で，下の活動をどの程度行いましたか。それぞれに番号で答えてください。

ⅰ　授業での学習指導の補助
（1とても多い　2かなりあった　3少なかった　4なし）

ⅱ　指導教諭の仕事補助（採点，教材作成等の手伝い）
（1とても多い　2かなりあった　3少なかった　4なし）

ⅲ　放課後の学習指導（児童への個別指導）
（1とても多い　2かなりあった　3少なかった　4なし）

ⅳ　児童の相談・遊び相手
（1とても多い　2かなりあった　3少なかった　4なし）

ⅴ　学校内や教室の環境整備（清掃活動等）
（1とても多い　2かなりあった　3少なかった　4なし）

ⅵ　学級活動や学校行事等のクラス指導の手

伝い
（1とても多い　2かなりあった　3少なかった　4なし）
vii　校内活動の行事・大会等（全体練習、準備を含む）
（1とても多い　2かなりあった　3少なかった　4なし）
viii　校外活動の行事・大会等（全体練習、準備を含む）
（1とても多い　2かなりあった　3少なかった　4なし）

7．あなたは，配置校での活動内容に満足していますか。
1 大いに満足している
2 まあまあ満足している
3 やや不満である　4 まったく不満である

8．あなたと周囲の人との，人間関係について，それぞれに該当するものを番号で答えてください。
i　子供たちとの人間関係
（1とてもよい　2よい　3少し困っている　4困っている）
ii　配置校の担任の先生との人間関係
（1とてもよい　2よい　3少し困っている　4困っている）
iii　配置校の指導の先生や校長先生との人間関係
（1とてもよい　2よい　3少し困っている　4困っている）

［Moodle での活動報告と返信について］

9．あなたは，「Moodle での活動報告」を活動内容や気付きを記録し，学びを深めるために活用しましたか。番号で答えてください。
1 大いに活用した　2 まあまあ活用した
3 あまり活用していない
4 まったく活用していない

10．Moodle での「報告に対する返信」は，配置校での活動に対する相談や学びのために役立っていますか。番号で答えてください。
1 大いに役立つ　2 まあまあ役立つ
3 あまり役立たない　4 まったく役立たない

受付年月日（2023/10/19）
受理年月日（2023/12/22）